

『就実教育実践研究』第12巻 抜刷
就実教育実践研究センター 2019年3月31日 発行

子供から「嫌われる」,「好かれる」 先生の言動から考える教育方法の留意点

Learning support method seeking for a teacher liked by children.

高木 亮・日下公貴・花房幹根
増成悠太・村上幸輝・

子供から「嫌われる」、「好かれる」 先生の言動から考える教育方法の留意点

高木亮（初等教育学科）、日下公貴（就実大学大学院2年）、花房幹根（就実大学4年）、
増成悠太（就実大学4年）、村上幸輝（就実大学4年）

Learning support method seeking for a teacher liked by children.

Ryou TAKAGI (Department of Elementary Education),
Koki HISHIMO (Department of Elementary Education)
Mikine HANAFUSA (Department of Elementary Education)
Yuta MASUNARI (Department of Elementary Education)
Koki MURAKAMI (Department of Elementary Education)

要旨

本研究は、学生視点から見た大学の先生の「嫌われる」、「好かれる」の評価を分ける言動を検討することである。そして、これらが現在の学生の幸福感にどのように影響をするのか数量的に検討を行うことを目的とする。これにより教員の言動がどのように児童生徒や学生といった子供に広く影響を与えるのかの推測的な考察を行う。その上で、教員側の言動として教育方法の選択的あり方について議論を行いたい。本研究を企画した保育者・教職志望学生の立場からすれば子供側（ここでは学生の立場）の心身や社会関係の現状といったもともと持つ幸福感の感じ方の特性の違いが教員の言動の受け入れ方に影響を与えるように感じられた。そこで、教員の言動が子供の幸福感に影響を与えるという前提には立ちつつも、子供の幸福感の現状にあわせてどのような言動の微調整を行うことが有効であるかについてもロジスティック回帰分析で推測的に検討を行うこととした。

キーワード

大学生、幸福感、社会関係資本、学校風土、子供対教員関係

1. はじめに

学校現場では児童生徒の不登校やいじめ問題などの生徒指導問題や全国学力学習状況調査などで測られる学力などさまざまな課題が存在する。この課題に対して少なくとも望ましい影響を持ちながらも、PISAで近年では学力などと同様の目的変数として注目されているのが幸福感である。本研究企画者である本学学生からしても教員と子供（児童や生徒、学生）との関係性は実感として双方の幸福感に影響を与えあっているように感じられる。そこで、幸福感に注目した調査研究を企画することとした。これとは別に、将来、保育・

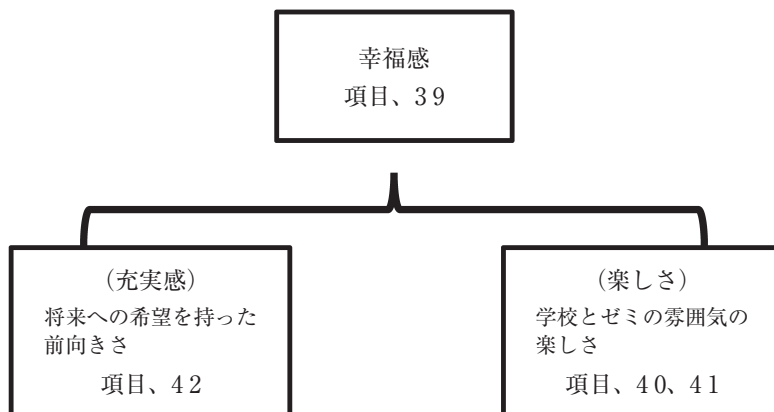
教職を目指している本学初等教育学科学生の視点に立つて最も関心が高い要素が、子供の側から考える「好かれる先生」と「嫌われる先生」の言動傾向である。学生の立場からすれば現在に至るまで先生対してさまざまな関係や印象を今まで持ってきた。また、日常では「無責任」と自分たちで自覚するほどまでの印象や子供間での評価を「先生」に対して子供どうしで行ってきたし、今も行っている。しかし、近い将来、学校園の現場にたつ身として、また実習等を経験した身として自分が先生として評価されることはある意味で怖いものであるとともに、先生の言動が児童生徒に強い影響を与えるという実感はとても重いものがある。学生の立場であるからこそいえるのが、子供ゆえの身勝手さとともに、自身の現在の不満、苦しさなどの感情的な「はけ口」ともなりかねないのが先生の言動とそこへの評価や実感である。本研究は量的調査を通して教員側がどのような言動を改善をしていくと子供との間に良好な関係を築くことができるか、またそれにより子供の生活を有意義にデザインすることができるかを考察したい。これは将来、評価を受ける側になる教職志望の学生にとっても心に留めておかねばならないことだと考える。また、これらの分析結果をもとに教え方（教育方法）の工夫の余地も考えたい。

2. 方法

(1) 学生生活の幸福度、充実度

本研究を行う上で、まず学生生活における幸福感とはどのようなものかを考えたい。そこで参照したのが北神ら（2007）による中学生と適応指導教室通所者の体験活動の成功度（エンジョイメント）を「楽しさ」と「充実感」で検証した視点を参考とした。それに基づき、ここでは幸福感とは充実と楽しさから成り立っていると考えた。ここでいう充実とは、例えば定期考査やレポート課題といった苦労・ストレスを乗り越えるような能動的感覚を指す。また、楽しさとは本人の努力とは関係なく受け身でも感じる感覚である。そしてこの充実と楽しさを得るには子供と教員との関わりが重要になってくるのではないかと仮説を立てた。特に、この関わりとして目的で触れたように教員の言動が大きく子供からすると「好き」と「嫌い」に評価が分かれてしまうことに注目した。しかし、小中学生を対象にした小中学校教員の「好き」「嫌い」を尋ねる調査は倫理的な問題が大きく、通常調査が許可されるとは考えにくい。そこで大学生を対象に「『好き』『嫌い』が分れる先生の言動特性」に関する質問が学生の幸福感を左右する調査を企画することとした。このメカニズムはある程度小中学生にも連動すると想定し考察を試みる。

しかし、大学における学生と教員の関わりは小中学校での同様の関係と比べそれ程多くはない。本学では1、2年次の間はクラス担任制であるが、授業を担当していないケースも多く、普段受けている講義の教員の方がまだ影響力があるケースも多そうだ。これらの教員の言動が及ぼす影響で良い例として考えられるのは、学生を褒める、親身に相談にのる、発言に一貫性があるといったことである。良くない影響を及ぼす言動は、学生を最蔑する、価値観の押し付け、自分の功績の自慢が多いといったことが考えられる。しかし、



図表1 幸福感の構成要素

小中学校の教員にとつては担任であったり学年単位で年間多数行われている体験活動での関係性などより濃厚な生活上での付き合いのなかで些細な言動も影響していることが考えられる。このあたりを留意して考察をすすめる。

また、以下に幸福度、充実度、楽しさに関する図を設けた。

この図は大学生が考えた幸福度、充実度、楽しさの関係を表したもので、それぞれに今回行った質問紙調査の項目番号を当てはめたものである。幸福度に関する項目39に内包する感覚として、充実に関する項目42、楽しさに関する項目40、41を仮定した。

就実大学教育学部初等教育学科では3年前期から卒業研究を旨とした研究の方法論と自らの課題意識に基づいた研究題目の設定までを行うこととなっている。心理学や社会学、インタビュー等の調査を通して教育効果測定を行う高木ゼミナールにおいて量的調査実施演習とともに先行研究検索・読解・活用などの習得を意図してゼミ分け決定後、3年次進級の時点で半年かけて学生共同作業を行うこととなっている。本調査はその期間、指導教官（高木）と大学院生（日下）の指導の下、花房と増成、村上がすすめた調査研究である。

調査の実施概要

平成29年6月～7月にかけて、学部学生3名、修士大学院生1名、教員1名で、すでに示したような尺度により構成される質問紙を議論し作成した。その上で、7月第一週に本学の教職必修科目の授業終了時に調査を行った。回答者は教育学部115名、文系学部54名であり、男子44名、女子125名であった。

全尺度にわたり5件法（リッカート法）で回答を求め、混乱をきたさないようにポジティブな回答が高い数字となるように質問全体を通して逆転項目処理を当初行う方針を立てた。

先行研究として岸田（1959）の「児童教員の人間関係の研究Ⅱ—児童の態度に影響する教員の条件—」をもとに質問紙を作成し、調査を行った。本研究では岸田の意図した様に

小中学生を対象とした調査を行うことができなかったので、大学生を対象とした。先行研究である岸田（1959）の研究はデータとして古く、多様に変化し続ける現代の学校には適さない調査項目も多いため質問項目を大幅に調整して調査を行った。しかし、現在の小中学校ではとてもではない本音の項目ばかりであり、子供から受けかねない教職員の不条理なまでの評価を把握する上で興味深い質問項目から構成されている。

岸田（1959）では児童と教員の人間関係として尊敬と親和、信頼、服従、嫌悪、反抗、軽蔑、恐怖、不満の九つの心理的概念を挙げていた。しかし、この中には反抗と服従の逆転項目ととれるような項目や親和と信頼など相互に似た項目も多かった。項目自体を極力少なくし、回答者の負担を軽減することと、概念の重複や類似は極力避けたい。そこで、尊敬と信頼、服従、恐怖、不満の五概念に限定した。この五項目に至るための原因として内向的と劣等感、厳格、神経質、外交的といった性格と強制と規律、自由、放任といった教育技術（学級経営）が関係していると考えたため、これを調べるための調査項目も追加している。本報告では、岸田（1959）由来の5概念の項目群と幸福に関する質問項目の関係を中心に分析を行う。

3. 結果と考察

(1) 因子分析

学生のゼミ担任又は担任に対する態度・言動・心理について因子構造を確認することにした。因子分析は最尤解、プロマックス回転を行い、因子パターン係数はいずれかの因子に0.35以上の数値を持つことを条件とした。

因子Ⅰ＜先生への不満のなさ＞ 寄与率30.22%			
A15 G 先生に心の中では反抗しよく思っていない。	0.7328	0.1457	0.0798
A21 G 先生の悪口を言うことがある。	0.7224	-0.0070	0.0333
A6 G 先生が嫌いなので学校に行きたくない	0.7109	0.0072	0.1274
A33 G 先生はひいきをするから嫌だ	0.6920	0.0028	-0.0100
A18 G できるだけ先生を避け遠ざかっている	0.6750	0.1883	0.0461
A36 G 先生に対して、先生と思えぬほど軽蔑することがある。	0.6573	-0.0698	0.3103
A24 G 先生に対して思っていることをうまく伝えられない	0.6303	-0.0319	-0.1611
A14 G 先生はよく小言をいしかるから嫌だ。	0.6258	-0.0498	0.2751
A37 G 先生は自分にだけ特にきつく当たっているのではないかと思う	0.5917	-0.0818	0.0795
A38 G すべての点で先生に満足できない	0.5650	0.0938	0.3068
A25 G 先生は自分のことをあまりかわいがってくれない	0.5325	0.1839	-0.0747
A8 G こんな先生の下では勉強してやらないと思うことがある。	0.5277	0.0710	0.2483
A29 G やかましすぎる先生	0.4716	-0.0637	0.1176
A35 G 先生がどこかへ転勤して裸れたらと思う	0.4559	0.0507	0.4780
A5 G わざと先生の言いつけに背くことがある。	0.4337	-0.2375	0.3281
A28 G 先生の実力がないので陰口を言ったり馬鹿にしたりする	0.4258	-0.0686	0.5011
A11 G 怖い先生	-0.7527	0.0584	0.2480
因子Ⅱ＜頼れ親しめる先生の力＞ 寄与率14.99%			
A4 先生がいるから学校が楽しい	0.1221	0.8073	-0.1189
A34 先生のようにになりたいと思いいその様子を真似ている	-0.0393	0.7876	-0.0989
A30 先生はよく自分をほめてくれるので嬉しい	0.0628	0.7581	-0.1937
A22 先生の話聞くのが待ち遠しい	-0.0748	0.7477	-0.0738
A7 先生に教えてもらってからぐんぐん力がついた	-0.1043	0.6958	0.0969
A20 先生に憧れ尊敬している	-0.0766	0.6900	0.2609
A3 明るい先生で楽しい	0.1603	0.6564	0.0593
A16 頼りになる先生	-0.0368	0.6420	0.3782
A1 先生とよく一緒に話をする	0.1163	0.6304	-0.1639
A27 熱心でよい先生	-0.0400	0.6188	0.2260
A32 わからないことは何でも先生に聞いている	0.1499	0.6173	-0.2228
A23 先生に言うことに嘘はないと思いついて従っている	-0.0593	0.4829	0.0541
A26 何でも知っている先生	-0.0905	0.4782	0.3353
因子Ⅲ＜先生としての迫力＞ 寄与率3.87%			
A12 G 教員としての力量が低い	0.2338	0.1080	0.5652
A17 G だらしない先生	0.1211	-0.0681	0.5490
A13 偉い先生	-0.2271	0.3996	0.5301
A19 G 先生の教え方がもっと上手ければいいと思う	0.1868	0.1225	0.4657
A2 G 先生に時々口答える	0.1213	-0.2162	0.3858
因子間相関		因子Ⅰ	因子Ⅱ
因子Ⅰ		1.0000	0.1746
因子Ⅱ		0.1746	1.0000
因子Ⅲ		0.4443	0.3526

※Gとは逆転項目を表す。

図表2 「好かれる・嫌われる先生の違い」因子分析表

項目番号39（学校生活幸福感）、40（学校の雰囲気よさ）、41（クラスやゼミの雰囲気よさ）、42（自分の将来への希望）にこれらの因子がどのように相関しているかを見るものなのでこれらの項目は抜いて因子分析を行った。なお、上記の「G」とは逆転を行った項目である。

因子Ⅰを見るとA11G（怖い先生）という項目で負の相関が見られる。この項目は逆転しているので怖くない先生だと不満が生じるという結果になる。そこで因子Ⅰは〈先生

への不満のなさ」と命名した。因子Ⅱは先生の積極性や心理的距離の近さを示す項目からなり〈頼れ親しめる先生の力〉と命名した。因子Ⅲは能力面でネガティブな先生の評価を逆転させた項目が目立ち、〈先生としての迫力〉と命名した。

(1) 目的変数の背景の検討

まず「好かれる」「嫌われる」先生への心理、言動、態度の3因子と学生の幸福関係項目（A39～42）と、ポジティブかネガティブか不明な項目（A9、10、31）の相関を確認した。下の表に示す。

	因子Ⅰ(17項目)	因子Ⅱ(13項目)	因子Ⅲ(5項目)	A9 ▽	A10 ▽	A31 ▽	A39	A40	A41	A42
因子Ⅰ「不満のなさ」(17項目)		0.2970	0.6059	-0.4240	-0.0745	-0.4295	0.1102	0.0393	0.3268	0.1255
因子Ⅱ「頼れる親しめる」(13項目)	0.2970		0.4260	0.0191	0.1822	0.0874	0.3614	0.3606	0.5312	0.3656
因子Ⅲ「迫力」(5項目)	0.6059	0.4260		-0.1149	-0.2587	-0.2739	0.0305	0.0550	0.3124	0.1357
A9 ▽	-0.4240	0.0191	-0.1149		-0.1659	0.1412	-0.0347	0.0394	-0.0828	-0.1252
A10 ▽	-0.0745	0.1822	-0.2587	-0.1659		0.0425	0.1649	0.0763	0.1676	0.0456
A31 ▽	-0.4295	0.0874	-0.2739	0.1412	0.0425		0.0546	0.0992	-0.1791	0.0934
A39「学生生活の幸福感」	0.1102	0.3614	0.0305	-0.0347	0.1649	0.0546		0.7703	0.4133	0.6117
A40「学校の雰囲気」のよさ	0.0393	0.3606	0.0550	0.0394	0.0763	0.0992	0.7703		0.4159	0.5601
A41「ゼミの雰囲気」のよさ	0.3268	0.5312	0.3124	-0.0828	0.1676	-0.1791	0.4133	0.4159		0.3388
A42「将来への希望」	0.1255	0.3656	0.1357	-0.1252	0.0456	0.0934	0.6117	0.5601	0.3388	

図表3. 学生の微妙な態度と幸福度、充実度、楽しさの相関図

A9（先生の前では大人しくしている）、A10（先生と友人感覚でつきあう）、A31（卒業後に先生を見返してやりたい）がポジティブな意味の項目なのかそれともネガティブな意味の項目なのかがわかりにくかった。が、表を見るとこれら3つの項目と因子Ⅰ～ⅢやA39～42との間に正の相関は無く、負の相関しか見られなかったため、ネガティブな意味を持つということがわかる。つまり、「猫をかぶる」（A9）や（親しむではなく）「馴れ馴れしい」（A10）、「見返したい」（A31）は学生生活の雰囲気の悪さや将来の見通しの悪さを併うようだ。

次に重回帰分析で学生の幸福関係項目（A39～42）の原因を探る。幸福関係項目を目的変数に、「好かれる」「嫌われる」先生の心理、態度、行動の因子Ⅰ～Ⅲとポジティブかネガティブか不明な項目を説明変数とした。

回帰式に含まれる変数(偏回帰係数・信頼区間等)				目 39 幸福感					
変 数	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	下限値	上限値	F 値	t 値	P 値	※: P<0.05 **: P<0.01
因子Ⅰ「不満のなさ」(17項目)	0.0154	0.0147	0.1147	-0.0136	0.0445	1.0987	1.0482	0.2961	
因子Ⅱ「頼れ親しめる」(13項目)	0.0440	0.0099	0.4001	0.0245	0.0636	19.7735	4.4467	P < 0.001	**
因子Ⅲ「迫力」(5項目)	-0.0672	0.0360	-0.1941	-0.1383	0.0038	3.4906	-1.8683	0.0635	t
A9 ▽	-0.0097	0.0804	-0.0102	-0.1685	0.1491	0.0146	-0.1209	0.9039	
A10 ▽	0.0502	0.0857	0.0481	-0.1191	0.2195	0.3428	0.5855	0.5590	
A31 ▽	0.0164	0.0908	0.0151	-0.1629	0.1958	0.0327	0.1809	0.8566	

回帰式に含まれる変数(偏回帰係数・信頼区間等)				目 40 学校の雰囲気					
変 数	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	下限値	上限値	F 値	t 値	P 値	※: P<0.05 **: P<0.01
因子Ⅰ「不満のなさ」(17項目)	0.0009	0.0130	0.0076	-0.0248	0.0266	0.0047	0.0684	0.9456	
因子Ⅱ「頼れ親しめる」(13項目)	0.0399	0.0088	0.4133	0.0226	0.0572	20.6867	4.5483	P < 0.001	**
因子Ⅲ「迫力」(5項目)	-0.0375	0.0319	-0.1233	-0.1004	0.0255	1.3823	-1.1757	0.2414	
A9 ▽	0.0092	0.0713	0.0110	-0.1315	0.1499	0.0167	0.1291	0.8974	
A10 ▽	-0.0274	0.0760	-0.0299	-0.1774	0.1226	0.1301	-0.3607	0.7188	
A31 ▽	0.0308	0.0805	0.0323	-0.1281	0.1896	0.1462	0.3823	0.7027	

回帰式に含まれる変数(偏回帰係数・信頼区間等)				目 41 ゼミ雰囲気				偏回帰係数の有意性の検定		** : P<0.05
変 数	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	偏回帰係数の95%信頼区間 下限値	上限値	F 値	t 値	P 値		** : P<0.01
因子Ⅰ「不満のなさ」(17項目)	0.0125	0.0126	0.0956	-0.0123	0.0373	0.9840	0.9920	0.3227		
因子Ⅱ「頼れ親しめる」(13項目)	0.0526	0.0085	0.4928	0.0359	0.0693	38.6119	6.2139	P<0.001	**	
因子Ⅲ「迫力」(5項目)	0.0065	0.0307	0.0195	-0.0541	0.0672	0.0453	0.2129	0.8316		
A9 ▽	-0.0076	0.0687	-0.0082	-0.1432	0.1281	0.0122	-0.1103	0.9123		
A10 ▽	0.0974	0.0732	0.0962	-0.0472	0.2421	1.7695	1.3302	0.1853		
A31 ▽	-0.1881	0.0776	-0.1787	-0.3413	-0.0349	5.8810	-2.4251	0.0164	*	

回帰式に含まれる変数(偏回帰係数・信頼区間等)				目 42 将来への希望				偏回帰係数の有意性の検定		** : P<0.05
変 数	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	偏回帰係数の95%信頼区間 下限値	上限値	F 値	t 値	P 値		** : P<0.01
因子Ⅰ「不満のなさ」(17項目)	-0.0014	0.0146	-0.0104	-0.0302	0.0274	0.0091	-0.0953	0.9242		
因子Ⅱ「頼れ親しめる」(13項目)	0.0435	0.0098	0.3980	0.0241	0.0629	19.5920	4.4263	P<0.001	**	
因子Ⅲ「迫力」(5項目)	-0.0157	0.0357	-0.0458	-0.0863	0.0548	0.1945	-0.4410	0.6598		
A9 ▽	-0.1551	0.0798	-0.1635	-0.3127	0.0025	3.7747	-1.9429	0.0538	t	
A10 ▽	-0.0721	0.0851	-0.0695	-0.2402	0.0959	0.7182	-0.8475	0.3980		
A31 ▽	0.0729	0.0901	0.0676	-0.1051	0.2509	0.6548	0.8092	0.4196		

図表 4. 学生の幸福や充実の規定要因（重回帰分析）

因子Ⅱより学生の幸福、充実、楽しさは頼れて親しめる先生がいることで高まり、因子Ⅲより教員に迫力があると学生の幸福感は下がる傾向が認められるとわかる。またA9、31より「先生の前で大人しくしていた」り、「将来見返してやろう」という気持ちがあると学生の楽しさは下がるということが分かる。これは表面的に大人しくしたり、内心の反骨を強く持つような教員への態度の背景となる性格や心理は幸福感だけでなくゼミの雰囲気（項目41）将来の希望と前向きさ（項目42）にもよくない影響を与えかねないことが示された。ただ教員との関係が比較的ゆるやかな大学生活でこのような状況であることは教員に対してだけでなく、もともと本人にあまりよくない心理・性格要素であるといえるのかもしれない。

(3) 学生の幸福や楽しさ、充実が極端に低い者の背景

次に、A39～42において「1」を回答した者、つまり幸福や楽しさ、充実を「最低」と回答した者をダミー変数「1」とした上でのロジスティック回帰分析をみてみたい。

A39（幸福）、A40（学校の雰囲気の楽しさ）は有意なオッズなし。つまり幸福や学校の雰囲気に楽しさを「全く感じない」者はここで測定したような大学教員に関する質問は関係なく、それら以外の要素に左右されていることがわかる。有意性のあった。A41（ゼミ

回帰式に含まれる変数(偏回帰係数・信頼区間等)				A41が最低				オッズ比の95%信頼区間		偏回帰係数の有意性検定		** : P<0.05
変 数	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	偏回帰係数の95%信頼区間 下限値	上限値	オッズ比	オッズ比の95%信頼区間 下限値	上限値	Wald	自由度	P 値	** : P<0.01
因子Ⅰ「不満のなさ」(17項目)	-0.0091	0.0562	-0.0800	-0.1192	0.1009	0.9909	0.8876	1.1062	0.0264	1	0.8708	
因子Ⅱ「頼れ親しめる」(13項目)	-0.2307	0.0600	-2.4694	-0.3483	-0.1131	0.7939	0.7059	0.8930	14.7906	1	P<0.001	**
因子Ⅲ「迫力」(5項目)	0.1347	0.1323	0.4580	-0.1247	0.3941	1.1442	0.8828	1.4831	1.0359	1	0.3088	
A9 ▽	0.0901	0.3227	0.1112	-0.5423	0.7226	1.0943	0.5814	2.0598	0.0780	1	0.7800	
A10 ▽	-0.0641	0.4738	-0.0723	-0.9928	0.8645	0.9379	0.3706	2.3739	0.0183	1	0.8924	
A31 ▽	0.6762	0.3558	0.7332	-0.0211	1.3735	1.9664	0.9792	3.9490	3.6129	1	0.0573	
定数項	1.1809	3.9532		-6.5673	8.9291	3.2574	0.0014	7548.7469	0.0892	1	0.7651	

回帰式に含まれる変数(偏回帰係数・信頼区間等)				A42が最低 ロジ				オッズ比の95%信頼区間		偏回帰係数の有意性検定		** : P<0.05
変 数	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	偏回帰係数の95%信頼区間 下限値	上限値	オッズ比	オッズ比の95%信頼区間 下限値	上限値	Wald	自由度	P 値	** : P<0.01
因子Ⅰ「不満のなさ」(17項目)	0.0089	0.0485	0.0783	-0.0861	0.1039	1.0090	0.9175	1.1095	0.0340	1	0.8538	
因子Ⅱ「頼れ親しめる」(13項目)	-0.0894	0.0313	-0.9571	-0.1508	-0.0281	0.9144	0.8600	0.9723	8.1601	1	0.0043	**
因子Ⅲ「迫力」(5項目)	0.1558	0.1193	0.5297	-0.0781	0.3897	1.1686	0.9249	1.4765	1.7041	1	0.1918	
A9 ▽	0.5516	0.2588	0.6804	0.0443	1.0589	1.7361	1.0453	2.8832	4.5420	1	0.0331	*
A10 ▽	0.0106	0.3007	0.0119	-0.5788	0.6000	1.0106	0.5606	1.8221	0.0012	1	0.9719	
A31 ▽	0.0270	0.3053	0.0292	-0.5714	0.6253	1.0273	0.5647	1.8689	0.0078	1	0.9296	
定数項	-4.5755	3.6329		-11.6958	2.5448	0.0103	0.0000	12.7410	1.5863	1	0.2079	

図表 5. 幸福感等が低い学生から見た先生の行動・言動

ミの雰囲気楽しさ)とA42(将来への前向きさ)をみてみたい。

項目A41(自分のゼミの雰囲気がよい)と項目A42(自分の将来に希望を持っている)では因子Ⅱや項目A9(先生の前では大人しくしている)が有意であった。これによりゼミの楽しさは頼られ親しめる(くり返しになるが“馴れる”とは異なる)先生がいたほうが上がるということがわかる。また、学生の充実度には楽しさと同じように頼られ親しめる先生がいたほうが上がり、先生の前では大人しくしているような性格では下がるということがわかる。この場合の先生の前では大人しくしているというのは上記の(2)目的変数の背景の検討で述べたようにネガティブな意味なので、先生との関係が上手くいっていない感覚を押し殺している状態といえるだろう。

4 総合考察

ピアソンの相関係数の表示によると、A39、A40、A41、A42の学校風土と幸福感維持に関する項目がどのような項目から影響を与えているのかが分かる。これからその4つの項目について解説していきたい。

まず、A39「自分の学校生活に幸福感がある」がどのような項目に影響を受けているのか解説していこう。A39はA16「頼りになる先生」、A23「先生のいうことに嘘はないと従っている」、A30「先生はよく自分を褒めてくれる」という項目と正の相関がみられる。学校生活に幸福感を与えるためには、自分をよくほめてくれる先生や信頼でき、頼りになる教員がいることが重要であることがわかる。反対に、項目A2「先生に時々口答えをしている」、A9「先生の前では大人しくしている」、A17「だらしのない先生」、A19「先生の教え方がもっと上手ければいいと思う」は負の相関を示しており、これらの項目があると、学生の学校生活における幸福度は低下することがわかる。教え方や見た感じのだらしなさは大学生にとってもネガティブな影響力を有するため、小中学生にはさらによくない影響力があるといえよう。

二つ目に、A40「学校の雰囲気が楽しくていい」について解説していきたい。A40は項目A23「先生の言うことに嘘はないと思い従っている」とA30「先生はよく自分を褒めてくれるので嬉しい」に正の相関がみられる。このことから、学校の雰囲気をよくしていくには自分を褒めてくれる教員と信頼のできる教員がいることが、重要なポイントであるといえる。また、A11「怖い先生」とのあいだには負の相関があり、あまりにも怖い先生がいる場合には、学校の雰囲気が悪くなるということもわかる。ただ学生目線で初等教育学科の先生を思い浮かべれば「怖い」「叱ると迫力がある」先生は実習や教採の前にとってもその雰囲気が緊張感として後の学生の「実りに就いた」ように感じる。「楽しくていい」を破壊しても「怖い」は長期的に重要な教員の態度、指導法である。しかし、この項目は今回、充実にポジティブな影響を示さなかった。

三つ目に、A41「自分のゼミの雰囲気がいい」について解説していく。A41は、項目A1「先生とよく話す」、A3「明るい先生で楽しい」、A16「頼りになる先生」と正の相関

を示している。このことから、ゼミの雰囲気をよくするためには、よく話す教員がいること、明るい教員がいること、頼りになる教員がいることが重要となってくる。また、A40「学校の雰囲気がいい」の時にも見られたが、A11「怖い先生」との間に負の相関がある。そのため、怖い教員がいるとゼミの楽しい雰囲気が悪くなるという結果が分かる。

最後にA42「自分の将来に希望を持っている」について解説していく。A42もA40「学校の雰囲気がいい」と同じくA23「先生の言うことに嘘はないと思い従っている」とA30「先生はよく自分を褒めてくれるので嬉しい」に正の相関がみられるこのことから、将来に希望を持つためには、信頼できる先生に出会うこと、自分を褒めてくれる、認めてくれる教員に出会う事が重要であるということが分かる。

またA39、A40、A41、A42は相互に関係しあい、大学生活に充実感があるものは自分の将来に希望があることやゼミの雰囲気がよくなるといったことが分かる。そのことから、この4項目が、崩れてしまうとすべて崩れてくるということ考える。これを崩しかねない「怖い先生」つまり叱った時の迫力は、今、卒業をひかえた私（増成）には重要な指導であったように感じる。分析結果上、このポジティブな価値を示せなかったのは残念である。

4つの項目を見てきたが、どの項目も主に私たち学生が考えていたものと同様のものが結果として見られた。また多くの項目で頼りになる教員が学生の充実度や幸福度を高めることがわかった。では、学生や児童生徒から頼りにされる先生になるにはどのようなことが大切であるのか見ていきたい。A16「頼りになる先生」に影響を与えているものは、A3「明るい先生で楽しい」とA13「偉い先生」とA20「先生に憧れ尊敬している」、A26「何でも知っている先生」、A27「熱心でよい先生」である。「怖い先生」としての態度はこれらの能力を子供に認めてもらった後に、はじめて有効に使える教育の方法なのかもしれない。

5 まとめと今後の課題

私たちは今回、大学生を対象にゼミ担任が学生の充実度や幸福度にどのような影響を与えるのかということを調べてきた。このことは私たちがもう来年度に迫った学級担任になったときに自分たちに向けられることであると考え。そのために私たちも学級の雰囲気を挙げていくために今回結果として挙げた項目を意識しておきたい。また、筆者の今の思いとして重要な、叱った時の「怖さ」は楽しさや幸福を破壊しかねない難しい指導法であることも分かった。今回は幸福感という主観に注目した。小中学生の幸福度測定も有益であろう。一方で、学力などの非主観的データは投入可能なら分析の対象としてみることで有益であろう。

今回はリッカート法を用いて調査を行ったのだが、今後は詳細なデータを測り具体的な指導方法のアイデアを得るために自由記述の項目も利用した調査を行っていくこと、教育関係以外の様々な学部、学校で調査をすることを実施していきたい。また、可能であれば、実際の小学生や中学生の児童生徒に調査をすることで、どのような結果の差異が生じ

てくるのか今後の課題としてゼミの後輩の努力を期待したい。

参考文献

- 安藤きよみ・中島望・中嶋和夫（2013）「小学校学級担任の学級運営等に関するストレス・コーピングに関する研究」『川崎医療福祉学会誌』22（2），pp.148-157,
- 藤田亜紀・森口佑介（2015）「児童期における教師に対するアタッチメント」『上越教育大学研究紀要』34，pp.111-120,
- 平田幹夫・伊波まどか・上江洲朝男（2017）「児童の学級担任に対する安心感尺度の作成」『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』24，pp.71-78,
- 平田幹夫・宮崎裕子（2016）「児童と教師の関係性を把握するための『児童と教師と木が立っている』図版パターンの作成」『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』23，pp.207-216,
- 菊池香・山本 奨（2015）「小学校における『担任教師の働きかけ』分析のためのカテゴリー作成の試みと教師の指導態度」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』14，pp.373-384,
- 岸田元美（1959）「児童と教師の人間関係の研究Ⅱ —児童の態度に影響する教師の条件—」『教育心理学研究』7（2），pp.1-12,
- 北神正行・高木亮・山崎克磨・原範幸（2008）「公立中学校および適応指導教室におけるチェックリスト運用体制の開発1」『岡山大学教育学部研究集録』137（1），pp.143-152,
- 児玉真樹子・川本竜太郎（2015）「教師の行動と児童の教師に対する信頼感との関係—発達段階に着目して—」『学習開発学研究』8，pp.81-89,
- 徳橋達男（1969）「小学校における教師と児童の人間関係 —担任教師をめぐる問題—」『研修員研究集録. 学校カウンセラー編 / 新潟県立教育センター』7，pp.29-34,

附記

本研究は初等教育学会助成を受け平成30年1月の日本学校改善学会第一回大会において筆者である学生メンバーで口頭発表を行うことができました。こころよりお礼を申し上げます。